

十一、明代

一、明初の経学と性理学

・〔¹〕（太祖・洪武帝）…元末の戦乱を制し、明王朝を創始。

浙東地方に住む学者の招聘につとめる。ここは南宋以来の多くの知識人・学者が移り住んだ土地で、代々著名な朱子学者を輩出し、〔²〕の学を重んじる学風で知られる。

洪武帝のブレーン…宋濂・劉基

彼らは朱子学者だったが、それにとらわれず、陸九淵の心学や仏・老などの思想も受け入れる。洪武帝は、儒・仏・道の三教を容認する姿勢をとり、朱子学を正統とする思想統制はなかった。科举制度…「設科詔」（一二三〇年）から「科举程式」（一三八四年）へ。

「四書」の尊重と朱子学の注釈重視。

〔³〕…建文帝を補佐、宋濂の弟子。仏・老の思想を批判。

「明の学祖」 朱子学を重んじる意識が強く、堅く節を守る剛毅な人柄。

・〔⁴〕

靖難の変（一三九九〜一四〇二）にて皇帝位を篡奪。多数の忠節の士が静粛。

皇位篡奪に内心不満をもつ知識人を懐柔し、自己の權威を高め治世の隆盛を天下に示す。

↓〔⁵〕の編纂…大部の百科全書。

一四一四年、胡広らに命じ、〔⁶〕を編纂。

『五經大全』『四書大全』『性理大全』 国子監や各地の学校に配布、科举の国定教科書。

ここに集められた経学説や性理学説は朱熹の学説とそれを敷衍した後学の解釈で占められる。

これにより、朱子学の〔⁷〕は完結。↓官学化

・純粹朱子学の時代…曹端、薛瑄、呉与弼。

・「明儒」の時代の到来

〔⁸〕…明代の学術史〔⁹〕

〔¹⁰〕…講学の記録『居業録』。その学統は「余干学派」と呼ばれる。

このほか、陳真晟、周蕙、丘濬（『大学衍義補』『朱子学的』『家礼儀節』）など。

二、陽明学の成立

・〔¹¹〕 陳献章 「の心学」

聖人となる工夫（努力）は「静坐」にあることを発見し、

「静坐の中から道の端緒を養ってゆく」という修養法を確立。

学問とは、宇宙（空間・時間）の本・万化（万物の変化）の源である「心」に求めるだけ。

↓〔¹²〕の学問の主張。明代心学の新たな方向性を切り開く。

著作は『白沙子全集』にまとめられている。

王守仁の心学との関連―「心即理」

張元楨…「この心こそが天理である」 黄潤玉…「格物」の「格」を「正」と解釈。

◎〔¹³〕（王陽明）↓「良知心学」―〔¹⁴〕

「格物」の学を聞き、「格物」を実践するがうまくゆかず、深い挫折感を味わう。↓二大転機

・三十七歳の時、宦官の怒りに触れて貴州竜場に左遷、ここで大悟する。

「格物」…「物に格る」ではなく、「物を格す」ことであるとする新解釈に到達。

「心」こそが「理」である。＝〔¹⁵〕

◎〔¹⁶〕（知と行は分けられない）を提唱。↑↓朱熹「知先行後」

十年後、『古本大学』を出版、「大学古本序」を執筆。「格物」「誠意」「新民」の独自の解釈。

〔¹⁷〕…朱熹の学説が中年未定の論であり、晩年にそれを悔い改めたことを証明するために、朱熹晩年の書簡と思われるものを集めて編纂。

〔¹⁸〕…王守仁の語録、陽明学のエッセンスとして知られる。

・五十歳の時、二度目のそして最も重要な思想的転機。

◎〔¹⁹〕を提唱。

『孟子』の「良知」を『大学』の「致知」の「知」に相当させた表現。

「良知」とはあらゆる外的な規範から完全に自由な人間本来の「知行」を表現する主体であり、それはつまり自己の「心」にほかならない。そして、この「良知」は万人に生まれながら備わっているものであり、学問とはひたすら自己の「良知」を「致す」ようつとめることにつきる。

・ 五十六歳の時、〔²⁰〕が行われる。

高弟の錢徳洪と王畿による、「四句教」をめぐる理解の対立について、両説の調停を図る。

「四句教」：あらゆる既成の理から完全に自由な「良知」の性質を鮮明にした学説、

〔²¹〕の宗旨を簡明に表現した標語。

その後、王守仁は生きてもどることはなかったため、この問題は王門の思想的命題として残され、明末の思想界に重大な論争を巻き起こすこととなる。

・ 晩年：「六経はわが心の財産目録」（経書の相対化）、「致良知」説を基盤とする「万物一体」の思想。

・ 著作は『王文成公全書』としてまとめられる（その最初の三巻が『伝習録』）。

三、陽明学の展開

・ 陽明学への毀誉褒貶

湛若水：王守仁とともに心学を提唱した盟友。

黄綰：王守仁の没後、陽明学が偽学批判にあつた際に弁護。晩年、陽明学は禅学であると批判。

羅欽順：王守仁の学問を厳しく批判した朱子学者。著作に『困知記』。

蔡清・林希元ら：出身地域の学問的伝統から陽明学を忌避。

王廷相：〔²²〕（「氣」の条理が「理」である）を徹底して説く。

朱子学の「理氣」論を否定し、「氣」が存在の根源であると主張。

・ 王門の分派

〔²³〕：王守仁に最も親しく接して感化を受けた門人。徐愛、錢徳洪、王畿（王竜溪）ら。

〔²⁴〕：陽明学の正統と評価される。鄒守益、欧陽徳、聶豹、羅洪先ら。

〔²⁵〕：陽明学は、「泰州と竜溪によつて天下に盛行し、またこれらのせいで伝授が途絶えた」。王良、顔鈞、何心隱、羅汝芳ら。誰でも聖人になれる、欲望の肯定。講学には下層民衆も多数参加して学問を楽しむ。

望の肯定。講学には下層民衆も多数参加して学問を楽しむ。

・ 王守仁の創出した良知説が教学の枠組みにとられない立場を示したことにより、儒仏道の三教の壁は取り払われ、〔²⁶〕の思潮が明末の思想界を席卷。

明末の高僧は、三教の境界を自由に乗り越えて、儒教や道教の教えをみずからの思想に取り込んだ。

・ 異端の思想家—〔²⁷〕

良知心学は、自己以外のものは聖人や経書ですらその権威をすべて相対化したため、既成の価値観に公然と異議を唱える者が現れる。

◎〔²⁸〕（李卓吾）

「童心」の思想（人間が生まれた当初の純粹に真なる心）、人間の自然な欲望を肯定、

『焚書』『藏書』などで伝統的な価値基準を根底からくつがえす主張、儒教の権威を否定。

交遊した思想家として、焦竑、楊起元、周汝登ら。

・ 王守仁が孔子廟に従祀（薛瑄・陳献章・胡居仁も）。陽明学は朝廷も認める正学となる。一方で、〔²⁹〕による「無善無悪」説批判が起こる。顧憲成、高攀竜ら。

明代思想史の最後を飾るのが、劉宗周。「慎独」（慎んで人欲をとどめる）、「誠意」説。

・ 経学における新傾向：『大学』説の流行、テキストの改訂。

『石經大学』：豊坊による偽作、明末の多くの学者がだまされる。

「考証学」につらなつてゆく新たな学風。

・ 「天主教」：イタリア人宣教師マテオ・リッチ（利瑪竇）による布教活動、『天主教義』。

「西学」：宣教師による西洋科学の紹介・伝授、漢訳。

「実学」：実際に役に立つ実用書。李時珍『本草綱目』、宋応星『天工開物』、徐光啓『農政全書』。

↓〔³⁰〕（世をおさめ役に立つ）の学の萌芽。